

地点第Ⅱ層で良好な資料が検出されている。周辺加撃石核をはじめ、打面転移石核など豊富な石核が認められる。特に、両面に剥片剥離を行う円盤状石核や柏原型石核に特徴がある。これらは、58次地点第Ⅲ層の石核と大きな違いはないと思われる。これが確かならば、石鐮の形態変化と剥片剥離技術は対応していない可能性が考えられるのである。石鐮の形態は激しく変化するが、素材生産技術は保守的な存在と考えられるのである。しかし、細かな変化も認められる。大原D段階で半割の円礫素材なのが、剥片素材へと変化し、両面へ剥片剥離を行う円盤状石核や柏原型石核が主体となるのである。

ただ、58次地点Ⅱ層と柏原Ⅱ層は近い時間関係にあり、短期間で石核素材の形状が大きく変化している。原石産地の違いによるものである。両者は目的剥片や定形石器の形態に大きな違いはなく、素材生産システムが変化したとは言えないだろう。システムは大原D14区直後に変容したと考えられるが、早期初頭の良好な資料がなく、詳細は明らかでない。

福岡地方の草創期末から早期前半にかけて、周辺加撃（求心状剥離）石核を中心に打面転移石核、その他という石核構成に変化はないようである。これらから剥離された目的剥片は、小形定形石器の素材に用いられている。石鐮をはじめ、スクレーパー類、楔形石器などである。周辺加撃（求心状剥離）石核は、大原D14区以降大きな変化が認められるが、主な原因は小形円形スクレーパーが消滅することによると思われる。58次地点Ⅱ層から柏原F遺跡Ⅱ層への変化は黒曜石産地の変更によるもので、定形石器には大きな変化はなかったと考えられる。

（6）九州における周辺加撃（求心状剥離）石核の変遷

福岡の縄文時代草創期末、早期前半を代表する素材生産技術は周辺加撃（求心状剥離）石核によって代表される。この石核は大原D遺跡で大量に検出され、元岡・桑原遺跡群58次地点や柏原F遺跡で石鐮の素材生産に特化した特徴的な在り方が認められた。周辺加撃（求心状剥離）石核の出自は旧石器時代に求められ、その変遷過程を検討する。旧石器時代の初頭から見られるが、直接的に関係すると思われるAT降灰後の原の辻型台形石器の素材生産技術から分析を始めたい。

① 井尻B遺跡（原の辻型台形石器）段階

原の辻型台形石器の素材生産のため開発された石核で、側面への打面形成と周辺加撃（求心状剥離）で目的剥片剥離を行い、規格的な剥片を連続して剥離している。石器製作の過程で、瀬戸内技法の影響を受けていることも特徴の一つである（萩原1983）。サヌカイト（安山岩）を用いた、国府型ナイフ形石器やその素材生産技法も受け入れたと考えられる。

井尻B遺跡群は、第6次・12次地点と37次地点A群で関連資料が調査されている（福岡市教育委員会2000、阿部・萩原2014）。37次地点A群は、原の辻型の素材生産とその製作に係わる456点からなる石器集中である。台形石器の殆どは失敗品や未製品で、石核もこれ以上剥離不能な残核（図136-58）である。第6次・12次地点は、石核（57）と台形石器が単独に近い状態で検出された。

典型的な事例は、長崎県平戸市入口遺跡に認められる（塩塚2002・2004）。A地点694b区は原の辻型台形石器16点、その未製品・失敗品数点、石核1点、小形搔器1点など380点が出土し、完形品が多い点が井尻Bとの違いである。その周辺からも多量の原の辻型関連資料（59～61）、国府型ナイフ形石器関連資料などが発掘されている。鋸刃状調整の特徴的な搔器（62）も認められ、寒冷適応の一つの姿かも知れないが、その数（割合）は少ない。

② 火除遺跡（今峠型ナイフ形石器）段階

原の辻型台形石器に後続する石器群と考えられ、今峠型ナイフ形石器をはじめ多様なナイフ形石器・台形石器・周辺調整尖頭器を組成している。黒曜石と安山岩を素材とし、いずれも縦長剥片と横長剥片を生産している。黒曜石剥片より横長剥片を剥離し、ナイフ形石器に加工した事例もある。井尻B段階に受け入れた瀬戸内技法が変容したものと思われる。

石核は接合資料（51）のように、周辺部からの加撃（求心状剥離）により剥離した幅広剥片のみならず、側辺部の縦長剥片も定型石器の素材として利用したと思われる。その残核は図136（52）のような形状になると思われる。前段階に比べると、幅広剥片の形状規制が緩やかとなり、打面形成のみ行っていた側面への剥離で生じた縦長剥片も石器の素材として利用されたと考えられる。前段階と異なるのは、側辺部が打面としてではなく、縦長剥片を得ることを目的に剥離されていることである。縦長剥片専用の石核も存在するようである。井尻B遺跡に類似する残核（50）や安山岩製の両面へ剥離を行うものも出土している。幅広剥片（56）は今峠型ナイフ形石器（53）や台形石器（54）、縦長剥片は小剥離痕ある小石刃（55）の素材に利用されたと考えられる。定形石器には多様な形態が認められることから、複数の素材生産技術が存在しているものと思われる（萩原1991）。

③ 宮ノ上遺跡Ⅸ層（小形ナイフ形石器）段階

北部九州ではナイフ形石器群終末期の様相が明らかでないので、南九州の宮ノ上遺跡Ⅸ層を取り上げる。宮ノ上遺跡Ⅸ層は、基部・先端部・片側辺加工の小形ナイフ形石器（46・47）を中心とする石器群である。小石刃（48）や剥片（49）には微細剥離痕が認められることから、これらも石器として使用されたと考えられる。

素材生産技術として、求心剥離型剥片剥離技術、単設打面連続剥離型剥片剥離技術、打面転移型剥片剥離技術があり、接合資料によりその詳細が明らかにされている（馬籠編2010）。求心剥離型剥片剥離技術は、目的剥片剥離の当初は主要剥離面などの素材の平坦な剥離面を打面とし剥離が進行するが、途中で石核素材を反転し、当初の作業面側から打面部に向かって剥離を加え、その後再度打面を反転させて剥離を進める。剥離最終段階で打点移動が石核周縁に沿って進むため剥離が求心的になる点と、目的剥片剥離段階の途中で素材を反転させることに特徴がある。技術運用は柔軟である。残核は周辺加撃（求心状剥離）石核の特徴を有している（43）。単設打面連続剥離型剥片剥離技術は板状礫や分割礫を素材とし、打面を平坦部に固定して打面調整をしない剥片剥離技術である。正面（打面部）と底面は最後まで剥離を施さず（44・45）、船野型細石核に近い形態である。

④ 福井洞窟7～9層（小石刃）段階

12・13層で検出された、位牌塔型細石刃核を伴う細石刃石器群（柳田2016）に後続する文化層である。2・3・4層に比べ大形なので、小刃器、小刃器石核と呼ばれた（鎌木・芹沢1965）。定型石器は認められず、その意味で細石刃石器群に近い存在と言えよう。これらは松浦産黒曜石円礫を素材としているが、横長剥片石核など安山岩製の石器群が伴う。黒曜石・安山岩の石核や剥片の形態的特徴は火除遺跡に極めて良く類似している。横長剥片剥離技術には瀬戸内技法に近いものがあり、井尻B・火除段階を引き継いでいると考えられる。

黒曜石製の石核は、正面と側面に剥片剥離を行うもの（34・35）が引き続き組成され、宮ノ上遺跡Ⅸ層に見られた正面が平坦な小石刃核（36）も組成されている。後者は、この直後出現する船野型細石核に類似している。前者には安山岩製もある。定型石器は認められないが、小石刃（幅広の細石刃？）に使用痕（小剥離痕や擦痕）が観察されることから、細石刃と同じように用いたと考えられる。石刃状のもの（37、40～42）と先端の尖るもの（38・39）がある（鎌木・芹沢1965、柳田2016）。

⑤ 福井2・3層（小形スクレーパー）段階

西海技法による細石刃石器群の段階も基本的に存続している。細石刃核ブランクの初期段階にこの形状をなす場合があり、西海技法（福井型細石刃核）の製作工程の中に位置づけられる可能性もある（鹿又ほか2015）。この技法では側面への打面形成や剥離面への利用は殆ど認められず、自然面を打面とする場合が多い（29）。剥離された剥片は、幅広の不定形品である（32・33）。剥片の一部は小形スクレーパーに加工されるが、定型的な細調整を施さず使用されたものも多いと思われる。

泉福寺洞窟の10層や7～9層でも同様の石核（30）が認められ（麻生編1985）、土器出現期の細石刃石器群に共通していると考えられる。ここでも、小形の円形スクレーパー（31）などの素材として利用されているようである。殆どの資料が円礫素材であり、その意味では福井洞窟7～9層段階を引き継いでいるようである。福井4層にも、針尾島中町産の黒曜石製自然面打面の周辺加撃（求心状剥離）石核が認められ（榎田2016）、土器出現期の細石刃石器群へと継続するものと思われる。西海技法（福井型細石刃核）出現前の福井4層に既に組成されており、明らかに細石刃核ブランクとは異なり石核に分類される。針尾島中町産黒曜石は不純物が多く、細石刃核にはあまり用いられない。このことから、福井2・3層段階のものも石核として目的剥片を剥離したものが多いと考えられる。

⑥ 大原D遺跡 14区Ⅱ・Ⅲ層（円形スクレーパー・石鏃）段階

前述のように、上げ底の条痕文土器に伴い多量の石核が検出されている。その中心をなすのは周辺加撃（求心状剥離）石核（21～23）で、針尾島中町などの黒曜石円礫を用いて大量生産されている。その形態的特徴は、船野型を主体とする土器出現前夜から、出現期の福井型細石核による細石刃石器群に伴う石核とほぼ同じである。

本遺跡におけるこの石核の発展は、小形円形搔器（24・25）の大量生産によるものと思われる。細石刃石器群の段階では調整が部分的であるが、本遺跡では定型的な完成された形態となっている。この小形円形搔器は、ヤンガー・ドリアス期の北部九州で完成された形態と言える。石核の一部には両面への剥片剥離が認められ、石鏃（26～28）などの素材も剥離されたと考えられる。この他、大量生産された楔形石器もこの石核や打面転移石核から剥離された剥片を用いているものと思われる（池田ほか2003）。

⑦ 松木田遺跡3次地点（石鏃）段階

撚糸文土器に伴い磨製品を含む石鏃や石槍の狩猟具中心とする石器類が出土している（米倉2001）。周辺加撃（求心状剥離）石核は両面に剥片剥離を行うもの（15・16）が主体となり、側面に剥離面が認められ打面に利用されている。円盤状を呈する場合が多く、比較的薄い小形剥片を連続的に剥離したものと考えられる。この点が、大原D段階のものとの差異点である。石鏃（17～20）が多数出土していることから、その専用の素材生産技術であったと考えられる。この段階になって、石鏃とその素材生産技術の強固な結びつきが認められるのである。

⑧ 元岡・桑原遺跡群 58次地点Ⅱ層（石鏃）段階

デポ出土資料（S141～146）に見るように、円礫を分割することにより石核素材を製作している。その両面に剥片剥離を加え、目的剥片を剥離している。残核は薄い円盤状を呈している図136（8・9）。打面は反対側の剥離面が利用されている。大形の石材を素材とする松木田段階とは剥片剥離の過程に違いがあるが、残核の形状は基本的に同じである。ただし、断面はかなり薄くなっている。石鏃（10～13）や楔形石器（14）などの素材を連続的に生産していたものと思われる。残核が円盤状を呈する素材生産技術の最盛期に位置するものと思われ、整った形状をしている。

⑨ 柏原F遺跡Ⅱ層（石鏃）段階

前述のように、柏原型石核（山崎・小畑1983）に特徴がある。58次地点が円礫の分割品を素材とするのに、角礫から剥離した大形剥片を素材とし、折断した事例も多い（1・2）。残核は折断を介することから、58次地点円盤状なのに対し、正面観が四角形または三角形に近い。打面は、折断面や反対側の剥離面を利用している。薄い幅広剥片が連続的に剥離されており、石鏃の素材生産に特化し、極限に発達した技法と考えられる。石鏃（3～6）の他、楔形石器などの小形石器の素材を生産していると思われる。石核素材製作の過程で、小形搔器（7）の素材を剥離している可能性がある。なお、この技法は以前から認められるが、大量生産されるのはこの時期からのものである。恐らく、腰岳産黒曜石原石の交易関係が確立し、入手が容易になったものと思われる。

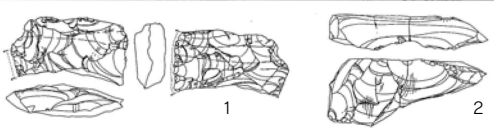

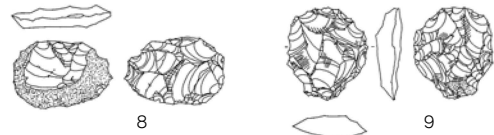
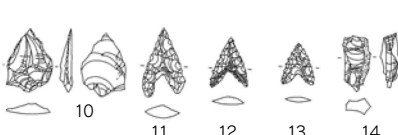
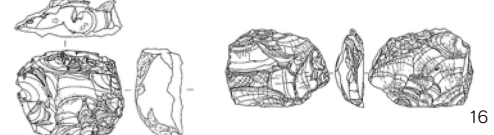


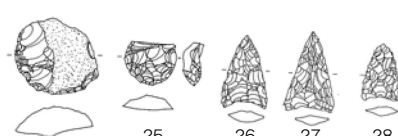





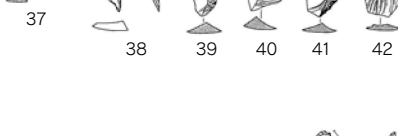

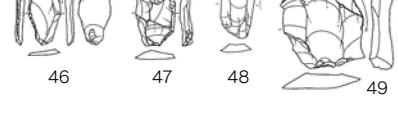


時代	歴年 cal BP	文化層	周辺加撃 (求心状剥離) 石核	定形石器
縄文早期	10,000	柏原F II層		
		元岡・桑原 58次 II層		
		松木田 3次		
縄文草創期	12,500	大原D II・III層		
	16,000	福井 2・3層 泉福寺 10層		
旧石器時代	17,300	福井 7～9層		
		宮ノ上 Ⅹ層		
		火除		
	27,000	井尻B 入口		

図136 周辺加撃(求心状剥離)石核の変容(1/3)